様態を表す「そうな」から「ようだ」への推移

紙　谷　榮　治

1．はじめに

江戸期では伝聞の意味は主に「げな」「そうな」「そうだ」によって表された。しかし，「げな」はしだいに「そうな」「そうだ」によってとってかわられることになる。一方，「そうな」「そうだ」は伝聞のほかに様態を表すことがあった。本稿では，様態を表す「そうな」「そうだ」が，しだいに，「ような」「ようだ」によって表されるようになり，現在では共通語から姿を消すに至った過程を，江戸後期から明治期にわたって見ることにする。

2．様態を表す「そうな」「そうだ」

江戸期には，つぎのように様態を表す「そうな」「そうだ」の例がしばしば見られる。これは，発話時点において，事態を推測したものである。

（1）　人目なければ抱合ひ涙の雨の横時雨，袖にあまりて窓を打つ。ハア、降って来たさうなと西受の竹樋子。反古障子を細目に明けて見やる野風の畠道。（冥途の飛脚・上）

（2）　さては娘がお気に入らぬの。ム、頭振らしゃんすはいやでもない。エ、知れた。とうから外に約束が有るさうな。（鑓の権三重帷子・上）

（3）　丹「ヲヤ雪が降てきたそうだ。　仇「ヱ，ドレトしやうじを明，ほんにマア，大そうに降て来たヨ。（春色辰巳園・四編・十二・十一条）

（4）　（夕）（略）したがもふ何時じやいな　（花咲）もうやがてくれるそふな。ほんに日はみぢかいこつちや。（陽台遺編・姚閣秘言）

（5）（通り者）あゝ筆か。なぜおれを見て，見ない顔していくしらん。成ほど成ほど，ゆふべおらが所へ来るはづで，こないによつて，それで見ない顔したそふな。（遊子方言・発端）

（1）は，「窓を打つ」音によって，雨が降ってきたと推測したものである。（2）は，相手の態度から，相手には既に約束があると推測したものである。（3）は，雪が降ってきたと推測したものである。（4）は，日没をむかえるときになったと推測したものである。これらは，発話時点における根拠にもとづくために，「そうな」「そうだ」は，普通，現在形のままで文が終止する。（5）は，さきほどあったときに，相手が自分に顔を合わせないようにした理由を推測したものである。

このように，「そうな」「そうだ」は推測を表して文を終止することが多く，それを従属節として用いことは少ない。

（6）気遣さうなに短う咄して聞かせう。（丹波与作待夜の小室節・中）

（7）湯屋の引窓が開いてるそうで，でへぶ煙つてへ（山東京伝・悪言鮫骨）

（6）は，相手が心配そうだからということを理由にしたものである。（7）は，あたりが煙たいことから，引き窓が開いていることを推測したものである。このように，「さうなに」「そうで」の形で従属節中で用いられることは少ない。さらに，「そうな」「そうだ」は「そうでございます」などのような敬語形も取りにくいというような特徴が見られる。

このように，「そうだ」は発話時における事態について推測するという場合に用いられることが多いが，推測する根拠になるのは，さまざまなものがある。つぎの例は，視覚にもとづくものである。

（8）ムゝ其の涙は，まだ母に恨が有るさうな。有るならいや聞きませう。（心中宵庚申・中）

（9）ある時，息子の留守に，おやぢ縁がわにてまり箱を見付，「まだやめぬそふな」とそばへより，両手でそつと蓋をあげ，内を見て，「ハア捨ておつたそふな」。（聞上手）

（10）よく見やれ，へこがあるそふな。（無事志有意）

（8）は，相手の見せた「涙」によって，自分に対する恨みがあると推測したもの，（9）は「見付」「見て」によって，蹴鞠に熱中している息子の行動を推測したもの，(10) は眼前に「へこ」があるのではないかと推測したものである。

つぎの例は，聴覚にもとづく場合である。

(11) 「隣の唐丸も唄ふそふな。(山東京伝・先開梅赤本)

(12) 「もう時鳥が鳴くそふな」(山東京伝・弐刻価万両回春)

(13) （お花）ァレ呼はな。何か用が有そふだ。ちよつと行て来るはな（寸南破良意・新ござ・六)

(11) は聴覚にもとづいて，「隣の唐丸」という鶏が鳴いていると推測したもの，(12) は時鳥が鳴いていると推測したもの，(13) は人の呼ぶ声にもとづいて，何か用があることを推測したものである。

次の場合は嗅覚にもとづくものである。

(14) 嗅ぐ鼻言ふ，「ア丶此近所に鰻屋があるそうな。気が味になつた。(山東京伝・扮接銀煙管)

(15) 「こいつ，せつな屁をひりおつたそうだ。ア丶臭い臭い」(山東京伝・早道節用守)

(16) 鼻が言ふ，「ア丶い丶匂ひだ。百介が所の拘杞を付けたそふだ」(山東京伝・人間一生胸算用)

(17) 「お婆がおならをすかしたそふな。さてさて臭い屁だ。こゝまで匂ふ。(山東京伝・諺下司説話自叙)

これらは，匂いにもとづいて，それぞれの事態が生じていることを推測したものである。

次の場合は触覚にもとづくものである。

(18) 夷「この枕は油染みたそうで，大ぶんすべすべする。そして，枕に脈があるやうだ」。(山東京伝・花之笑七福参詣)

(18) は，「すべすべする」という感触にもとづいて，枕が「油染み」ていることを推測したものである。

次の場合は，五感に限定されない総合的な根拠にもとづいて推量したもので

ある。

(19) 下人めも有るさうな。油断するな。まっかせこんだ。(博多小女郎波枕・上)

(20) 寝たぼけて，つまらぬ事を言ふ。「ばかばかしひ船頭だ。五百羅漢へ付たそうだ。モシ，荻寺へはどう行きやす。(山東京伝・早道節用守)

(21) 「はてさて隙行く駒の足は速ひぞ。もふ正月の宿へ来たさうな」(山東京伝・正月故叟談・中)

(22) 「婆めは，まだ心が直らぬそうな。あのような孝行な嫁を邪見にしをる。(山東京伝・京伝主十六利鑑・中)

(23) (ト嘘をして) あゝ，御新造様が悪く言つてるさうな。(河竹黙阿弥・仮名手本硯高嶋・塩山邸玄関の場)

(19) は，その状況から下人の存在が当然推測されるもの，(20) は，ねぼけて羅漢たちの姿を見たことにもとづいて推測したもの，(22)は「嫁を邪見にし」ているという事実にもとづいて，「婆め」の「心が直」っていないと推測したもの，(23) は「くしゃみ」を発したことにもとづいて，「御新造様が悪く言つてる」と推測したものである。これらのばあいには，それぞれの状況にもとづいて推測したものである。

このような，活用語の終止形に接続する「そうな」「そうだ」は，やがて，「ような」「ようだ」で表されるようになる。しかし，その移行の時期は語によっても異なるようである。いずれにせよ，その結果，様態を表す「そうな」「そうだ」は衰退していくことになる。

以上は，「そうな」「そうだ」が活用形に接続するばあいであるが，「そうな」「そうだ」は名詞に直接接続することもできる。その場合においても，発話者が，発話時点において推測したことを表す。

(24) あれへ大名一頭，瓜核《うりざね》顔の旦那殿東寺から出た人さうな。(丹波与作待夜の小室節・下)

(25) 扇屋夫婦情深く，なうこなたは聞及ぶ藤屋の伊左衛門殿さうな。忍ぶことも時による。娘とも思ふ夕霧が臨終の心が堪能させたい。早う逢

うて下され。（夕霧阿波鳴渡・あひの山）

これらの場合にも，「そうな」「そうだ」は，しだいに「のような」「のようだ」によって表されるようになる。

(26) 森「旦那がどうしたって心配をしていらア，家を間違えたのか，往ったり来たりしている，どうも豊島町の棟梁のようだが，どうしたのかと思っていた」（業平文治漂流奇談・十六）

これについては，稿を改めて論じることにする。

このように，一般には，「そうな」「そうだ」をとっていたものが，「ような」「ようだ」をとるようになるのであるが，本稿では，江戸後期から明治期におけるこの推移をみるために，同一の動詞について，「そうな」「そうだ」と「ような」「ようだ」のいずれをとるかを見ることにする。

なお，江戸期においては，地域によって判断辞のちがいがあり，上方は「そうな」「そうぢゃ」，江戸では，「そうな」「そうだ」が用いられている。上方と江戸とでは，この判断辞の違い以外にも，「そうな」「そうだ」に差異があることが考えられるが，ここでとりあげようとする問題に関しては大きな違いが見られないようなので，本稿では，しばらく上方と江戸の例をあわせてあげることにする。

また，江戸期の終止形として「そうな」「そうだ」などのうちのいずれをとるかも問題であるが，上方には「そうな」，江戸には「そうだ」を用いることとする。その表記も，底本には「そう」「さう」「そふ」「さふ」などがあるが，本稿では，用例を引用する場合は底本の仮名遣いに従い，それ以外は，現代仮名遣いに従うことにする。ただし，句読点については，底本を改めたところがある。また，印刷の都合により，二字以上に相当する反復記号は使用せずに，反復する箇所を繰り返して表記することにした。振り仮名は，底本にあるもののうちから，最小限度のものを示すにとどめた。

3．「ような」「ようだ」

一般には，様態を表すために「そうな」「そうだ」をとっていた語が，「よう

な」「ようだ」をとるようになることは確実であるが，「そうな」「そうだ」をとっていたときに，それと類似の意味を表すのに，「ような」「ようだ」が平行して用いられていたのではないかと考えることができる。とすれば，「そうな」「そうだ」とは異なる「ような」「ようだ」の意味を明らかにする必要がある。そこで，この両者の違いを比べてみるために，「ような」「ようだ」の場合について，「そうな」「そうだ」の場合と同じように推量の根拠にもとづいて分けてみることにする。

「そうな」「そうだ」に見られた視覚にもとづく推測の例は「ようだ」の場合には見出しがたい。そのような場合は，もっぱら「そうな」「そうだ」によって表されていたもののようである。

次の場合は聴覚にもとづく推測を表したものである。

（1）「どうか狼の鳴声がするやうだ。油断をするな」（山東京伝・通気智之銭光記）

（2）トいゝつゝ石をひろい，川のなかへなげこんでかんがへ　犬市「イヤこゝらが，どふかあさいよふだ。（東海道中膝栗毛・三・下）

（1）は，何らかの音について，それが「狼の鳴声」であることを推測したものであり，（2）は，盲目の二人が石のたてる音を手がかりに，川を渡るのに適した浅い場所を見つけたというものである。

次の場合は特定の感覚ではなく，状況にもとづいて総合的に推測したものである。

（3）そして最《もう》，余り，長座になつたゝ。どふか日が暮る様だ。（春告鳥・三編・十七）

（4）（医者が）ト北八がみやくをとり，しばらくかんがへ「ハゝアなるほど，きさまはなんともないよふじや。（東海道中膝栗毛・五編追加）

（5）北八「（略）わつちらも船にのつた時は，くらがりではあるし，とりちがへたとはしらず，どふやら居どころも，ちがふたよふでございやしたが，乗合のことだから，まゝのかはとそれなりに，くたびれまぎれに，ツイねてしまひやして，けさこゝへ来て見りや，乗合の衆のう

ちに，見しつたかほがひとつもねへは，ふしぎなことだと，いつていやしたのさ。（東海道中膝栗毛・六・上）

（4）は，医者が，病人の脈と比べるために，わざと体に異常のない北八の脈をとったあとで，しばらく考えてから，それが正常な脈であると言ったものである。（5）は，船に乗り間違えたことをいったものである。これらのうち，（1）（2）（3）では「どうか」「どふか」，（4）では「なるほど」，（5）では「どふやら」のような語をとっている。

次の場合は記憶にもとづいて推測したことを表したものである。

（6）　十吉「かんだにはわたくしもおりましたが，どふかあなた方は見申たよふだ。（東海道中膝栗毛・後編）

（7）　点「京ばしの鳶さらひけり揚豆腐。鬼「それは地口だネ。お待なさい。地口といふものでもない。雑俳の点者抔に見せたらわかりませう。タシカ，何とか唱て，さやうな口調があるやうだテ。（浮世風呂・四・上）

（8）　くり「ハテナ，そふいふ声は聞たやうな声だ。 かき「フフム，なるほど，わしも聞たやうだ。（浮世風呂・下）

これらは，記憶にもとづいて推測したものであって，「どふか」「たしか」「なるほど」をともなっている。

このように，「ような」「ようだ」は，思考や記憶にもとづいて発話時点における状況を推測するものである。それに対して，様態を表す「そうな」「そうだ」は，発話時点における状況そのものを推測するものである。

以上のように，「そうな」「そうだ」と「ような」「ようだ」には違いがあったと思われるが，このことを両者をとることのできる動詞「酔う」について見てみることにする。「酔う」は，「そうな」「そうだ」と「ような」「ようだ」をともにとることができるが，両者は次のように用いられている。なお，以下の例の「酔う」には，酒に酔うことと，たばこに酔うことがあるが，今回の比較には影響しない。

（9）　忘るゝ斗リに時はうつる　（酔）ムゝ小しさひらしい初会だけに，くそ高まんで，まくが長イ。ァゝたばこによつたよふだ。（南江駅話）

(10) (かゝ)(こゝろへ) 徳どん。ぬしやァきつく酔しつたそうだから舟でねかし申さつせへ。(酔姿夢中)

(11) (庄) なんだか多葉こに酔つたようだ。(多佳余宇辞)

(12) 弥二「せがれめは，もふよつたそふな (東海道中膝栗毛・初編・発語)

(13) お長「(略) おや，わつちとしたことが，重い口からべらべらと，似ても似附かぬ親仁の声色，僅のお酒に酔つたさうだよ。(河竹黙阿弥・夢結蝶鳥追・四幕目・雪の下会所の場)

このうち，(9) は，遊里で待たされた客がまちくたびれてすったたばこに酔ってしまったように感じること，(11) は理由は明示されていないが，たばこによってしまったように感じるという発話者の気分を表したものである。それに対して，(10) (12) は他者が酔った状態にあるという推測を表すものである。(10) は「舟宿かゝ」が船頭の「徳」に対して，泥酔した客 (采遊) を舟に乗せるように命じた時の発話である。(12) は「せがれ」が酔って寝てしまったと推測したことを述べたものである。(13) は，「そうだ」をとっているが，これは発話者が自らの状態を客体化してのべたものと見ることができる。自らが酔ったと感じるばあいは，「ような」「ようだ」を用い，酔った自分を客体化して推測するときは「そうな」「そうだ」を用いたものであろう。

同じようなことは，動詞「似る」の場合においても見られる。

(14) (馬)ヱヽ畜生め。モウちつとあるきやアがれ。めんよう姉《あんねへ》を見ると足が遅へ。おれに似たさうだ。(軽井茶話道中粋語録)

(15) 共をつれ人からよき男壱人通る。捨畏てもく礼する。コレあれがおらが所のだよ。(幸・善) いゝ人からたの。誰にか似たようだ。(青楼楽美種・発端)

(14) は，「馬士」の発話であるが，馬の歩みが遅くなることを，女性を見とれて足が遅くなる自分に似ていると推測したものである。それに対して，(15) は，とおりがかった人品のよい男を見て，思い出すことはできないが，だれかに似ていると推測したものである。これは，疑問の「か」をとるなど，記憶にもとづいて推測したものであることを表している。

つぎの文は，一文中に「そうだ」と「ようだ」がともに用いられている場合である。

(16)　夷「この枕は油染みたそうで，大ぶんすべすべする。そして，枕に脈があるやうだ」。（山東京伝・花之笑七福参詣）

夷と弁天が密会したところ，福禄寿は「身に黒子を着て」，長枕と自分のあたまをすりかえ，自分が枕になって二人の会話を聞くという場面である。夷は福禄寿の差し出した頭を枕と思いこんだうえでの発話である。「油染み」ているとしたのは，「すべすべする」という触覚にもとづいて推測したものであるのに対して，「脈がある」は話者がその状況にもとづいて推測したものである。

このように，「そうな」「そうだ」は，主として感覚によって推測するのに対して，「ような」「ようだ」は，思考や記憶にもとづいて推測したことを表すといえる。「ような」「ようだ」は，推測したことを表すため，それについての確実性を表す「どふか」「どふやら」「何だか」などをともなうことができる。さらに，「そうな」「そうだ」は文末にくることが多いのに対して，「ようだ」にはそのような制約は見られない。そのため，「ようだ」は第8章（32）の「ようだから」のように条件句となることができるのに対して，（10）（16）のように「そうな」「そうだ」が条件句となることはまれである。また，「そうな」「そうだ」は敬語形をとることがまれであるのに対して，「ようだ」は，第5章（4）のように，敬語形として「ようでござい（り）ます」などをとることができる。さらに，「ようだ」は第7章の（54）（55）のように否定形をもとるようになった。

以上のように，「そうな」「そうだ」と「ような」「ようだ」には違いがみられるが，制約の多い「そうな」「そうだ」に対して，それを条件句として用いたり，敬語形にしたりする必要から，「そうな」「そうだ」と類似の意味を表す「ような」「ようだ」が多く用いられるようになったと見られる。その結果，「そうな」「そうだ」が「げな」にかわるものとして，もっぱら伝聞の意味を表すようになるとともに，様態の「そうな」「そうだ」の表した意味はしだいに「ような」「ようだ」によって表されるようになる。

なお，「そうな」「そうだ」が活用語に接続するばあいには，つぎのように，動詞の過去形にも非過去形にも接続することができる。この場合の非過去形と過去形は，互いに対立する意味を表し，非過去形のばあいには，「しようとしている」「しつつある」，過去形のばあいには，「すでに実現している」「すでに完了している」の意を表すことになる。

(17)　ホンニもふ油屋が来た。もふ日が暮れるそふだ。(山東京伝・古契三娼)

(18)　(夕)(略)したがもふ何時じやいな(花咲)もうやがてくれるそふな。ほんに日はみぢかいこつちや。(陽台遺編・姚閣秘言)

(19)　もふ日がくれるそふだと支度する所へ(当世左様候)

(20)　お梶「(略)あれ，もう日が暮れるさうな，どれ行燈なと附けませうか。(河竹黙阿弥・都鳥廓白浪・二幕目・惣太内の場)

(21)　(略)茶やの亭主階子から首を出しなから，もし御二人さま御出なされましたといへは，若菜ひな鶴は少しつんとし，よそ目づかいしなから，もふなん時でありんすェといへは，イヤモずいぶん駕もいそがせたれ，けふはきつうはやく日がくれたそふな。ェ、久しひもんサ。けさからよふ気をもませなんしたの。(三幅対)

(17)～(20)の「そうな」「そうだ」に上接する「暮れる」は日が暮れようとすること，(21)の「くれた」は既に暮れたことを表す。このように，「そうな」「そうだ」が動詞の過去形にも非過去形にも接続し，それぞれの意味を表すことができるのは，「ような」「ようだ」の場合でも同じである。

4．連用形接続の「そう」

この「そうな」と近い意味を表すのに，連用形接続の「そう」が用いられることがある。前章(17)～(20)の「そうな」「そうだ」の例は，日が暮れることについて推測したことを表したものであるが，それに近い意味を連用形接続の「そう」によって表すことができる。

(1)　日も暮《くれ》そふな。一盃あがつて帰らふ。(廓遊唐人寐言)

(2)　曇つた天気が何時迄も無精に空に引掛つて，中々暮れさうにない四時

過から家を出て，兄の宅迄電車で行つた。（それから・七）

（1）では，「暮」に「クレ」とふりがなが付けられている。前章の（17）～（20）では，日が暮れたことを推測するのに，「そうな」を用いて，「暮れるさうな」として表されているが，この「暮れそふな」は，それと同じ内容を連用形に接続する「そうな」を用いて表したものである。

前章の（17）～（20）と本章の（1）の違いは，様子を表す名詞「そう」を終止形（本来は連体形）と連用形のいずれによって修飾するかによって生じたものであって，本来，両者に基本的な違いはなかったと見られる。終止形に接続する「そうな」「そうだ」は，前章で見たように，過去・非過去の別に続くことができるので，それらの別にもとづく推測が可能である。それに対して，連用形に接続する「そう」の場合には，時にかかわらず動作・作用が実現しようとしている状態にあることを表す。また，終止形に接続する「さうな」は，状況にもとづく推測しか表すことができないのに対して，連用形に接続する「そうな」は，「そうにない」のように，事態が成立する可能性の無い場合にも用いられる。

しかし，「ある」「ない」のような存在に関する語や，「よい」などの形容詞の場合には，終止形接続の「そう」と，連用形接続の「そう」とでは，その差は判然としなくなる。また，次のように，連用形接続の「そう」で表されているものは，現在ではむしろ終止形接続の「ようだ」によって表されるようになっている。

（3）　若し万一の事がありさうだつたら，其前にたつた一遍丈で可いから，逢はして呉れないか。（それから・十六）

（4）　見懸からいふと或は人に嫁いだ経験がありさうにも思はれる。（彼岸過迄・二十九）

（5）　真事の言葉には後がありさうだつた。（明暗・二十四）

（3）は，仮定条件を表したものであるが，現在では，このような場合に，「ようなら」の形をとることが多い。（4）（5）も現在では，「ように」「ようだ」をとることが多い。

5.「明ける」「暮れる」の場合

前章までのように，様態を表す「そうな」「そうだ」と「ような」「ようだ」には違いが認められるようであるが，以下には，同一の語が「そうな」「そうだ」と「ような」「ようだ」のいずれによって表されているかを見ることにする。とりあげる語は，「そうな」「そうだ」が接続することの多いものを選ぶことにする。

最初に，「明ける」「暮れる」と時刻を表す場合について見ることにする。

［明ける・明るくなる］

（1） 客「明るそふな。帰ふ帰ふ。（辰巳之園）

（2） 金「モウ夜があけるそふだ。（甲駅新話）

（3） もふ明たそふな。これはいなねばならぬ。（郭中奇譚（異本）・弄花巵言）

（4） （雑魚）イヤもう御真実なけつかうなありがたいおしめしで夜の明ケましたようでござりますが，とふせ好キの道やめにもいたしますまい。（浄瑠璃稽古風流）

（5） ヲヤ夜があけるさふだ。（回覧奇談深淵情）

（6） 弥二「もふ夜があけたそふなト北八もともにおき出れば，（東海道中膝栗毛・三・下）

（7） 弥次「ォヤもう夜があけるさうだぜ。」（木曾街道続膝栗毛・二）

（4）は，ある高慢な男が，浄瑠璃の稽古のしかたについて夜を徹して「雑魚」に忠告を与え，それに対して「雑魚」が礼をいったものである。このような場合，「明ける」は，「そうな」「そうだ」をとると考えられるが，敬語形のために，「そうな」にかわって，「ようでございます」が用いられたのであろう。敬意を含む場合には，現実の事態を直接表現するよりも，「ような」によって話者の推測として表す方が適当だからであろう。

［暮れる］

第3章（17）～（21）のように，「暮れる」に「そうな」が接続したものは，

日暮れになったことを推測したものである。これらの例からみると，このようなばあいの「暮れる」は，本来「そうな」「そうだ」をとっていたと見られる。

それに対して，つぎの例は，「暮れる」が「ようだ」をとったものである。

（8）（梅）「なんでもないのサ。マア上ませう。そして最，余り，長座になつたネ。どふか日が暮れる様だ。大そふに久しく遊びました。トにはかにかへる身づくろひをして，きせるをしまひ，さかづきをあづけにせんといふ。（春告鳥・三編・十七）

この「様だ」は前出の（17）～（21）のように，日がくれようとしている事態を推測したものではなく，長座したために日が暮れようとする時間に及んだだろうと推測した発話と見られる。「どうか」のような語を伴っているのも，そのためであろう。

［時刻］

（9）「もう昼だそふで，腹が少し北山の武者所だ。（山東京伝・賢愚湊銭湯新話）

（10）もはやごんごんと明六ツさふな。ばかな事に夜をあかした。（古今吉原大全）

（11）モフ四ッを打そふな。おつかれ遊したらう。さァおやすみ遊はせ。（契情買虎之巻）

（12）（略）時の鐘がごんごん（大）モウ八ッになるそふだ，おかのさん。おかのさん。（真女意題）

（13）（初夜の鐘）サアモウ戌刻ださうだ。（為永春水・春色英対暖語・四・七）

（14）孫三「今日が暮れたと思つたが，もう五つになるさうだ，なるほど夏の夜は短いことぢや。（河竹黙阿弥・敵討噂古市・二幕目・雲津縄手松原の場）

時刻を推測するときの表現には，江戸期を通じて「そうだ」が用いられたようである。明治期になると，このような時刻の呼び方をしなくなるので，このような表現も見られなくなる。

6.「降る」「やむ」の場合

本章では，雨などが「降る」「やむ」とその同義語の場合について見ることにする。

［降る・降ってくる・やってくる・くる］

（1） 涙の雨の横時雨袖にあまりて窓を打つ。ハアヽ降って来たさうなと西受の竹櫺子。反古障子を細目に明けて見やる野風の畠道。（冥途の飛脚・上）

（2） （くら）（此さはぎに目がさめ）まだはやいはな。そして降るそうだ。（傾城買四十八手・やすひ手）

（3） 丹「ヲヤ雪が降てきたそうだ　仇「ヱ，ドレトしやうじを明，ほんにマア，大そうに降て来たヨ。（春色辰巳園・四編・十二・十一条）

（4） おや，（筆者注：雨が）降つて来たやうだが，引窓があいて居やあしねえか。（河竹黙阿弥・夢結蝶鳥追・三幕目・恋ヶ窪お長隠家の場）

（5） 大「（略）雪がちらちらと来たやうだから」　仁「成程降つて来ましたね」（菊模様皿山奇談・十五）

（6） ぽつりぽつりと雨が顔にかゝつて来る。　惣「富五郎降つて来たやうだ」（真景累ヶ渕・六十三）

（7） 惣「母様雪降つて来た様だから，此処に居ると冷てえから，此の観音様の御堂に這入つて些《ちつ》と己《おれ》おつぺそう」（真景累ヶ渕・八十）

（8） さア棒組，急げ急げ，少し雪がやつて来たやうだぜ。（後の業平文治・二十三）

（9） たゞ嫂丈が雨が降り込むやうだといふので，已を得ず上から飛び下りて又窓を閉て換へてやつた。（行人・一）

これらの例は雨や雪が降ってきたことを推測したものである。（1）（2）（3）は「そうな」「そうだ」をとっていて，本来のものと見られる。（4）（5）（7）は，「が」「から」などで終わる従属節となるために「ようだ」をとったとも考

えられる。しかし，（6）（8）（9）のように，述部に「ようだ」が用いられた例があることを考えると，本来は「そうな」「そうだ」をとっていたものが，しだいに，「ようだ」をとるようになったものと考えられる。

なお，このようなばあいには，次のように推量を用いない表現をとることも可能である。

（10）柳「オヤオヤ，雪が降つて来ましたヨ」（為永春水・春色英対暖語・十三・二十五）

（11）あゝ又今の間にすつかり曇り，ばらばら降りに降つて来た，（略）（河竹黙阿弥・因果小僧・序幕・八つ山下の場）

また，次のように「様子」を用いた表現をとることも可能である。

（12）宗「あい……はア……つひ何うも……はア大分まだ降つてる様子で，ばらばら雨が戸へ当りますな。（菊模様皿山奇談・三十九）

なお，「降る」のばあいは，この終止形接続の「そうだ」にかわって，連用形接続の「そう」をとる例が見られ，雨が降ろうとしているという推量を表す。

（13）あるとき，かの若衆きたりければ，いろいろに馳走して，「今日は雨も降りさうなほどに，あきなひもなるまじ。（鹿の巻筆・四・きかぬ奴の衆道）

（14）「けふはどうやら降りさうな空」と，案じながらの暑気見まひ。（鹿の子餅・雷）

（15）（佐）イヤどふいたいでもふりそふだ。ふられては宿元のあんばいがちがつてわるいといふうちすさまじく雨ふり出し，みなちりちりにおさらばおさらば。（広街一寸間遊）

（16）雨がふりそふじや。（東海道中膝栗毛・六・上）

そのほか，「雨」を名詞として推測するものにはつぎのようなものがある。

（17）ハァ時雨さうな。いざ帰らうと。（国姓爺合戦・第二）

（18）「雨の様ね」と嫂が聞いた。（行人・二）

このように，名詞に直接下接する場合にも，「そうな」から「のよう（だ）」への推移がみられる。

［やむ・あがる・天気になる］

(19)　(左平)「ときに，雨はやんだそふじや。この間に，ちやとふねへ出かけましよかい。(東海道中膝栗毛・八・下)

(20)　ほどなく雨もかみなりもやみ，そらもあをあをとなりたるに（かはちや)「うれしや天気になつたそふな。(東海道中膝栗毛・八・下)

(21)　(十兵)どうか，雨もあがつたやうだ。(河竹黙阿弥・蔦紅葉宇津谷峠・五幕目大切・鈴ヶ森の場)

これらは雨があがったことを推測したものであるが，「やむ」「あがる」などの動詞は，(19)(20)のように「そうな」「そうじや」をとっていたが，(21)のように，「ようだ」をとるようになったものと考えられる。

なお，このような場合，「様子」が用いられることがある。

(22)　松山「(略)これみどり，雪は止んだ様子ぢやの」(河竹黙阿弥・鼠小紋東君新形・四幕目・稲葉幸蔵内の場)

7．「いる」「行く」「出る」「来る」「帰る」の場合

次に人間の動作を表す「いる」「行く」「出る」「来る」「帰る」などについて，「そうだ」「ようだ」のいずれをとるかを見ることにする。

［いる］

つぎは，「いる」の場合である。

(1)　(喜の)「おいらんはどけへいかしつた。今迄いさしつたやうだが，もふどけへかみえなくなつた。ほとゝぎすのようだ。(通言総籬)

(2)　米「それでも下に人が居るさうで，はなしごゑがするから，(春色恵の花・二編・中・九回)

(3)　手拭を被つて女が往つたり来たりしてゐるから，文「森松や，彼処に女が居るやうだなア」　森「へー雪女郎《ゆきぢようろ》ぢやアありませんかえ」(業平文治漂流奇談・二)

(4)　三「新吉が居る様なれば寄らねえが，新吉が居なければ一寸逢つて行きたいから窃《そつ》と覗いて様子を見て，新吉が居ては迚も顔出し

は出来ぬ」（真景累ヶ渕・三十九）

（2）は，発話時点において，人がいることを推測したものである。一方，（1）は，発話時点においてはもはや存在しない過去の事象，（3）は不確かなことを推量したものであるために，「ようだ」を用いたものであろう。

つぎは，「いない」の場合である。

（5）（与茂）「（略）こゝのかみさん（筆者注：お政をさす）は見世をあけて，どこへいつてゐるかしらんト大拍子になり，下座より，お色，按摩の女房の形にて，出て来り　（お色）おまさん（筆者注：お政さんのこと），この間は。オヤオヤゐないさうだ。（東海道四谷怪談・初日二番目序幕・浅草境内の場）

（6）与「何うも檐先へ顔を出すと蚊が舞つて来て，鼻孔から這入つて口から飛出しさうな蚊で，アヽ何うもえれえ蚊だ，誰も居ねえやうで」（真景累ヶ渕・三十九）

（7）と怖々《こはごは》四辺《あたり》を見ると，瓜番小屋に人もゐない様だから，まア好《い》い塩梅と腹が空《へ》つて堪《たま》らぬから真桑瓜を食しましたが，庖丁がないから皮ごと喫《かじ》り，空腹だから続けて五個《いつつ》ばかり喫《た》べ，それで往《い》けば宜しいのに，先へ行つて腹が空つてはならんから二つ三つ用意に持つて行かうと，右袂《こちら》へ二つ左袂《こちら》へ三つ懐から背中へ突込《つつこ》んだり何かして，盗んだなりかう起《た》つと，向《むこう》の畑の間から百姓がによこりと出た時は驚きました。（真景累ヶ渕・五十九）

（8）宅の門口迄来ると，家の中はひつそりして，誰もゐない様であつた。（門・十二）

（9）縁側から座敷を見回すと，しんと静かである。茶の間は無論，台所にも人はゐない様である。（三四郎・五）

これらは，発話時点において，人がいないことを推測したことを表したものであるが，そのような場合には，本来（5）のように「そうな」をとっていたも

のが，しだいに，（6）以下のように「ようだ」をとるようになったものと考えられる。

なお，このような場面は，つぎのように，「様子」によっても表すことができる。

(10)　（市）なに，この裏はあいつが親仁の，網打の七五郎の内さ，もし爰へでも来て居るかと，さんげさんげに化けて来て，内の様子を窺つたが，小猿もお熊も居ねえ様子さ。（河竹黙阿弥・網模様燈籠菊桐・五幕目・路地外の場）

(11)　と十手を振上げて打つて掛るやつを取つて抉《えぐ》つたから，ヒヨロヒヨロとひよろついて台所の竈《へつつひ》でボツカリ膝を打つて，裏口へ蹌踉《よろけ》出したから，しめたと裏口の戸をしめ，辛張《しんばり》をかつて置いて表を覗《のぞ》くと人が居る様子だから，確《しっか》り鑰《かきがね》を掛けて燈光《あかり》を消し，庖丁の先で箪笥の錠をガチガチやつて漸《やうや》く錠を明け，取出した衣類を身に纏《まと》ひ，大小を差して，サア出やうと思つたが，迚《とて》も表からは出られませんから，屋根伝ひにして逃げやうと，階子《はしご》を上つて裏手の小窓を開けて見ると，（真景累ヶ渕・十四）

［行く］

(12)　平「あゝやかましい。宵からの口きゝが，やうやう出て行そふな。（遊子方言・しののめのころ）

(13)　（女郎）うれしや，やうやうゆくそふだと思ひながら（傾城買四十八手・しつぽりとした手）

(14)　（房）「吉や吉やェヘモフ吉や吉や。ァノやらふめへ，モフとこひかけつかリャァかつたそふだ（といふ所へ外の船人通ル）（房）八とん八とんおらが吉をしらねへか（八）「今橋にいやしたつケ（房）ッゥあつちへ行ならはやくこひといつてくんねへ（回覧奇談深淵情・其二）

(15)　侍「コリヤまてまて，南無三宝，あやつ，もふどこへか行おつたそふな。身共大切の草鞋を馬につけておゐたが，もつて行おつたそふじや，

殘念な。江戸まではかれるわらふじじやものを（東海道中膝栗毛・四・上）

(16) やがてそこにちかづきたるに，かの目あての火は，おのれとだんだんさきへあゆみ出して行ていにおどろき　弥次「ヤアヤアヤア，あの家がどふかあるひて行よふだ。北八「ほんになアこいつはおかしい。弥次「イヤおかしくない。（東海道中膝栗毛・五・下）

(17) たみ「ヲヤ嬉しい。久助どんが何も角もしてからお使ひに往たそふだ。（春告鳥・初編・三・五）

(18) 文弥「もし姉さん姉さん，あゝ又門口ではないか。（言ひつゝ門口探り見て，）こりや門口でもないが，もしや今の彦三様のあとでも追うて行かれたか。おいち（注：妹の名）やおいちや，はあゝこれも一緒に行たさうな。（河竹黙阿弥・蔦紅葉宇津谷峠・二幕目・文弥内の場）

(17) は，朝起きた腰元たみが，下男の久助があさのしたくをすべてととのえてから，主人の使いに出たことを推測し，よろこんでいる場面である。(18) は，さきほどまで門口にいた姉「きく」が，妹といっしょに隣家にいったことを知らない盲目の文弥のせりふである。それに対して，(16) は不確かなことを推量したものであって，「どふか」をともなっている。

［出る・出かける］

(19) 妹のお捨は乳母と遊びに出たさうな。（鑓の権三重帷子・上）

(20) 由「ナニモウはやくはねヘョ。みんながそろそろ出かけるそうだ。（春色梅児誉美・三編・九・十八齣）

(21) 文弥「（略）もし，十兵衛様，旦那様。（ト向うへ思入あつて，）あ，もうおいでなされたやうだ。（略）」（河竹黙阿弥・蔦紅葉宇津谷峠・三幕目・宇津谷峠の場）

(22) とうとう飯場にゐる当番は悉く出払つた様だ。（坑夫）

(21) は，盲目の文弥が，「峠の下口」まで送ってきてくれた十兵衛がすでに文弥をおいて帰っていったことを推測したものである。河竹黙阿弥のこの作品では，「行く」「出発する」という動作に対して，(18) (21) のように，「さうな」

と「やうだ」が用いられていることになる。

これらは人が出て行く，または，出て行ったことを推測したものであるが，そのような場合に，「出る」「出かける」などは，本来，(19)(20)のように，「さうな」「そうだ」をとっていたが，しだいに，(21)(22)のように「ようだ」をとる例が現れるようになったものと考えられる。

なお，この「ようだ」の表す意味は，つぎのように，「と見える」によっても表すことができる。

(23) 弥二「ハテがつてんのいかぬ。アノやらうが風呂敷包も笠もねへ。大かたおいらが寐てゐる内，たつてしまつたと見へる。(東海道中膝栗毛・二編・上)

[来る・お出でなさる・見える]

(24) 市之進殿帰られては生死の有ることと，中使の下女に隙やつたれば，兄の不義の使に妹の乳母が来たさうな。直に会ふも口惜しい。留主をつかうて奥から様子を立聞きせう。(鑓の権三重帷子・上)

(25) ハア誰ぞ庭へ来たさうな。(鑓の権三重帷子・上)

(26) 「初松魚《はつがつほ》が来たさうな。小僧よ，脇へ売れぬうち，早く呼べ。(山東京伝・京伝守十六利鑑・上)

(27) (大) 是さん，太夫様ンへおしらせ申しやつたかや。(さん) そこへ行コて丶おつしやつて丶御さりました。はあもふあれへ御出遊したそふな。(郭中奇譚(異本)・弄花巵言)

(28) (かこ)(略) 茶やのくつぬきへずつとかつぎごむ。内より女房がみつけて，介さんがお出だそふなと小ごへにて云と娘も下女もばらばらと立出，お出なさんしたかへといふ内かごのたれを上げてずつと出るを見て(略)(契国策・南方)

(29) 表の方ニたのみませう。たのみませう。(河桃) 小僧誰か来たそうな。(雲井双紙)

(30) 「番町さん」と，いゝたそふな顔で，つんとして，「これに御出なんせへ」といふて，立てゐつた。客が来たそふで。(遊子方言・発端)

(31)　(山本や)「はぁどなたかお出なさつたそふな。(遊子方言・発端)

(32)　おもてぐちにいきづえのをとカツチカツチ　いも七「ヲヤもふ来たそふなトかどの戸をそつとあけてとんで出，(東海道中膝栗毛・発端)

(33)　女の声聞ゆれば，女郎様方がお出でたさうな。(木曾街道続膝栗毛・四編)

(34)　ます「オヤオヤ，(筆者注：仕出しが) 御酒も温めて来たさうだ。(春色英対暖語・一・二章)

(35)　(勢左) やれやれ，嬉しや，見えたやうだ。(河竹黙阿弥・人間万事金世中・序幕・辺見宅遺言状開きの場)

(36)　(ト向うを見て，) や，向うへ誰か来る様だ，うつかり爰にやあ居られねえわえ。どれ，須彌壇の下へ隠れて居ようか。(河竹黙阿弥・三人吉三廓初買・六幕目・吉祥院の場)

(37)　(勢左)誰か表へ来たやうだ。(河竹黙阿弥・人間万事金世中・二幕目)

(38)　蟠「便をしたいが，少し向ふから人が来るやうだから。(業平文治漂流奇談・十六)

(39)　爺「婆さんや誰か来たやうだぜ，ちよつくら見て来さつしやい。(根岸お行の松　因果塚の由来・六)

(40)　新「何だ庭の方から来たやうだぜ。(真景累ヶ渕・四十四)

(41)　「阿母さん阿母さん，門の中へ入つて来たやうだよ。」(平凡・十二)

(42)　一度下座敷で若々しい女の笑い声が聞えた時などは，誰か御客が来ているようだねと尋ねて見ようかしらんと考えた位である。(彼岸過迄・停留所・四)

(26) は，初がつおを売る行商人が来たの意で，呼び声にもとづいて推測したものである。(33) は，女の声にもとづいて太夫がすでに勝手まで来ていると話者である「さん」が推測したものである。

これらは，人が来たことを推測したことを表したものであるが，(24)～(34) の例からみると，「行く」などは，「さうな」「そうだ」をとっていたが，しだいに，(35)～(42) のように「ようだ」をとるようになったものと考えられる。

なお，「くる」の否定形に「そうだ」が接続したものには，つぎのような例が見られる。

(43)　(黒) モウこねへそふだ。(傾城買四十八手・やすひ手)

なお，このような場合における推測を表すのには，「様子」も用いられる。

(44)　いつも度々来る様子だ。(春色辰巳園・初編・三)

また，このような場合の推測には，連用形に接続する「そう」が用いられる。

(45)　北「もふきそふなものだト此内女がてうしをもつてくると，ふたりながらなるくちゆへ，あいのおさへのとのみかけ（東海道中膝栗毛・初編・発語）

なお，明治期には，このような場合の推測に，「ようだ」の他に，「らしい」をとるようになった。

(46)　耳には桐油を撲つ雨の音と，釣台に付添ふて来るらしい人の声が微かながらとぎれとぎれに聞えた。(思ひ出す事など)

(47)　其所へ奥の方から足音がして，主人が此方へ出て来たらしかつたが，次の間へ入るや否や，(門・九)

(48)　先づ市内で二三日市外で二三日しめて一週間足らずで東京へ帰る予定で出て来たらしかつた。(行人・兄・五)

次の例は，物が近づいて来たことを「ようだ」によって推測したものである。

(49)　北八「アレアレ青い火が見へる。男「ヱヽどふかこつちへきおるよふじや。(東海道中膝栗毛・五・下)

(50)　花「ハテナ，白い物が此方《こつち》へころがつて来るやうだが何だらう，多助さん先へ立つて往きなよ。(真景累ヶ渕・九十五)

(49) は「どふか」，(50) は「が」をともなっている。

[帰る・戻る]

次の例は「帰る」について推量したものである。

(51)　(角) 隣の客人は帰られたさうナの　(春) ヱあいさつき。(南客先生文集)

(52)　ヤ，こちの人が帰らしゃんしたさうな。(東海道四谷怪談・後日二番

目序幕・小塩田隠れ家の場）

(53)　玉「ナニ否がりは仕ませんけれども，姉上さんが帰つた様だからサ（春告鳥・五編・二九）

(54)　母「あの清蔵はまだ帰《けえ》りませんかな……何うしたか長《なが》え，他の者を使ひにやれば，今までにやア帰るだに……こら，清蔵が帰《けえ》つたやうぢやアねえか，帰《けえ》つたら直に此処へ来《こ》うといへ」（菊模様皿山奇談・二十四）

(55)　母「文治が帰つたやうではないか。 森「お帰《けえ》りでございます」（業平文治漂流奇談・十三）

(56)　下女は帰つた様である。（野分・三）

次の例は「帰らない」について推量したものである。

(57)　六部「（略）そりやあさうと同行の，怪典どのはもう帰つて来さうなものだが。（ト下手の紙帳のうちを見て，）まだ隣りの修行者どのも帰らぬさうだ，おほかた冷え凍えて帰るであらう，どれ気をきかして帰らぬうち，里で寝酒を買つて来ようか。（河竹黙阿弥・しらぬひ譚・序幕・錦ヶ嶽辻堂の場）

(58)　「実は佐々木君の所へ来たんですが，居なかつたものですから……」「ああ。与次郎は何でも昨夜から帰らない様だ。時々漂泊して困る」（三四郎・七）

(51)（52）と（56），（57）と（58）の例からみると，「帰る」などは，本来「そうな」「そうだ」をとっていたが，しだいに，「ようだ」をとるようになったと考えられる。

なお，「ようだ」はつぎのように，「と見える」によって表すこともある。

(59)　所へ車の音ががらがらと門前に留つたと思つたら，忽ち威勢のいい御帰りと云ふ声がした。主人は日本堤分署から戻つたと見える。（吾輩は猫である・十）

8.「思う」「する」「違う」の場合

本章では,「思う」「する」「違う」が,「そうな」と「ようだ」のいずれをとるかについて見ることにする。

[思う]

(1) そして有たけの所作を一へんさらへることを座持じやと思やるそふなに,にごりささずとけいこといふたがよかろぞへ。(夢中生楽)

(2) (歌橋) イヤあてこともねへ。此女郎はおれをばしつかい角さいくの達磨たとおもふさふた。(婦美車紫虧・東雲のてれ)

(3) (清) さらはひらをくわんとてトしやれながら明て見て,なんだ此切身は鯖じやアねヱか。イヤコリヤアスコ来たは。イヤモ甚くさしくさし。長いもにしいたけとはきつい病人。イヤおらをは麻疹てもしたと思ふそふた。(穴知鳥・廓中の諸訳)

(4) (酒) (略) けいせいどもは品をするとつて不人相をするし,きつひりやうけん違ひじやァねへか。高へつらをすりやァ正月だとおもふそうで,どこやらの火の見といふ面をしやァがる。これむすこや,ゆだんしやるな。一躰下の紀月が茶が好だから,傾城まで茶がすきだよ。客をばみんな童子格子だとおもふそうだ。宗匠新宿といふ所はもふなへわへなへわへと独りぢれてゐる所へ (売花新駅・閨中幷ニきぬきぬ)

(5) (通り者)「此新は,おれをば人間じやないとおもふそうな。(遊子方言・更の体)

(6) (如雷)「マァきゝねェ。ぬしも知つて居る通りだ。其上,今も,隣で煙草のんだの,馬を呑だのと,おれが目をば,こんぺいとうの附目,太鼓二だと思ふそふな。人を附にした。(辰巳之園)

(7)「おらが内を日高川だと思ふそうな。誰も安珍らしい者も見へぬが」(山東京伝・甘哉名利研)

(8) きた八「ハヽアおやしきだけ,大屋様も二本さしているな。弥次「ばかアいふな。踏込さへはいていると,大屋だとおもつてけつかるそふ

だ。（東海道中膝栗毛・四・上）

（9） 弥次「きいてくれ。おれもあんまりごうはらだから，いまいましい婆々あめだ。たはしをもつてどふしやアがるといつたら，ハイハイとぬかしてひつこんだが，やがて又庖丁のおれたのを，もつてうしやアがつて，これでおせなかの埃を，こそげおとしてあげませうかと，おれを鍋か釜のよふにおもつていやアがるそふな。いまいましい。（東海道中膝栗毛・五・上）

（10） おいらを乞食だとおもふさうだ。（木曾街道続膝栗毛・一）

（11） いさ「（略）そうすると山の神めェ，琉球芋なら一本十六文宛もしべいといふ角を二本生しやァがつて，いきなりに胸ぐらよ。不断ならはりくぢいてギゥの音も出させねヘンだが，此方が不始末といふもんだから，死た暗を見るやうにだァまつ居《て》たらば，（筆者注：妻は）斉日に性霊ぢやァあんめへし，爰ぞと思つたさうで，日頃の羽ぱたきを一時にしやァがつて，小言の候の，撰取て十三文，すてきと並やァがつた。（浮世床・初編・上）

（12） 米「一旦はお前も私も意地をはる料簡で，お互に依怙地な事もしたけれど，また斯うして察ると何故最初ッから，斯ういふ塩梅にして貰はなんだかと思ふやうだョ。」（春色梅美婦祢・四・七回）

（13） 仇「そんな事を思ふやうだとたのしみだけれど，何に付ても悲しくなるよトいふ後から，丹次郎はちよいと抱つく。（春色辰巳園・四編・十二・十一条）

（14） 其様にして養育て貰ツても露程も有難いと思ツてないそうで此頃ぢや一口いふ二口目にや速ぐ悪たれ口だ。（浮雲・一編・六）

（15） 其時広田さんは急にうんと云つて，何か思ひ出した様である。（三四郎・七）

（16） 何でも遠慮さへすればそれが礼儀だと思つてるやうだね。（行人・塵労・二十）

（12）は，自らの心情を表す「ようだ」の用法であり，（13）は仮定条件を表

すのに「ようだ」が用いられたものである。「思う」は，本来「そうな」「そうだ」をとっていたが，しだいに，「ようだ」をとるようになったものと見られる。

なお，「思う」という動作を推測するばあいには，(15)(16)の「ようだ」のほか，つぎのように，「らしい」によって表すことが多くなる。

(17) 下女の考へでは猫と人間とは同種族ものと思つてゐるらしい。(吾輩は猫である・二)

(18) 然し主人の考へでは一年持ち，二年持ち，五年持ち十年持つた以上は生涯持たねばならぬと思つてゐるらしい。(吾輩は猫である・四)

(19) 考へれば分ると思つてゐるらしい。(吾輩は猫である・五)

(20) 最初から見物人と思つてゐるらしい。(カーライル博物館)

(21) 和尚は鳩の眼が夜でも見えると思ふてゐるらしい。(草枕・十一)

(22) 本当に馬鹿だと思つてゐるらしい。(三四郎・三)

(23) 最も関係の深い母ですら，書斎へ行くのを余り難有いとは思つてゐなかつたらしい。(行人・帰つてから・二十)

(24) さうして離別になつた先の亭主は，丸で責任のないやうに思つてるらしいんだから失敬ぢやないか」(行人・帰つてから・三十一)

(25) Hさんは兄の本領として夫を当然の如くに思つてゐるらしかつた。(行人・塵労・十五)

［する］

(26) (かむろ)(袖を引ぱり引ぱり)ぬしや巴やの若ィ人によく似ていなんす。イッッ性わるだ。(客)おれをまわしかたにするさふだ。(郭中奇譚・弄花巵言)

(27) ヲヤいつそ苦労をさしつたそうで，おやせなはいましたは。(春色梅児誉美・四編・十二・二十四齣)

(28) 惣「お園はまことに希代《きたい》だ，あれは感心な堅い娘だ，あれは女中のうちでも違つて居る，姉は何だか，稽古の師匠で豊志賀《とよしが》といふが，姉妹《きやうだい》とも堅い気象で，あの新五郎は頻りとお園に優しくするやうだが，(真景累ヶ渕・八)

これらは人の動作を推測したものであるが，「する」は，本来「そうだ」をとっていたと考えられる。

なお，この意味の場合，次の例のように，「らしい」をとることがある。

(29)　今は表向に縁談を申込むばかりに為たらしい。（婦系図・二十四）

［どうかする］

(30)　（川）ァィわつちやァ此ごろじやァどうかしたそうでどうもねむくつて成いせんよ。（粋町甲閨）

(31)　（北八）「（略）可愛そふに。どふかしたそふな。（東海道中膝栗毛・発端）

(32)　藤「今姉さんが少しどうかしたやうだから。（春色梅児誉美・三編・九・十七齣）

(33)　仇「そうさねへ。斯だもの，いけねへのう。どうかしたそうだト下においたる猪口を干，顔をしかめて「アゝつめてへ　増「それ見な，あんまりながいからだ。よせばいゝのに，それこそどくだト燗でうしを取る。（春色辰巳園・後編・四・七回の上）

(34)　坊がどうかしたさうだ。（八笑人）

(35)　おい猫がどうかしたやうだなと云ふと，さうですね，矢つ張り年を取つた所為でせうと，妻は至極冷淡である。（永日小品・猫の墓）

これらは人や動物が，通常でない状態に陥っていることを推測したものであるが，以上の例からみると，「どうかする」は，「そうな」「そうだ」をとっていたが，しだいに，(35) のように「ようだ」をとるようになったものと考えられる。

なお，この意味の場合，次の例のように，「らしい」をとることがある。

(36)　成程さう思つて見ると，何うかしてゐるらしくもある。（三四郎・十）

［ちがう］

(37)　弥次「ハイわつちは，ソレ太郎兵へさんの，町内のものじやが，ハテどふかちがつたよふな。（東海道中膝栗毛・五編追加）

(38)　わつちらも船にのつた時は，くらがりではあるし，とりちがへたとは

しらず，どふやら居どころも，ちがふたよふでございやしたが，乗合のことだから，まゝのかはとそれなりに，くたびれまぎれに，ツイねてしまひやして，けさこゝへ来て見りや，乗合の衆のうちに，見しつたかほがひとつもねへは，ふしぎなことだと，いつていやしたのさ。(東海道中膝栗毛・六・上)

(39) ゐんきよ「モシモシ，こなんは誰じやいな。北八「ハイ，是はちがつたそふな。モシ，さかやへはどふまいりますへ。 ゐんきよ「ハヽアよめたわいの。こなんは，おもてのさかやのおきやくじやな。其椽側をひだりにとつてすぐにいかんせ。(東海道中膝栗毛・八・上)

(40) あだ「(略) ォャお前の衿元の風体が違つた様だネ」(春色梅美婦祢・二編・四・七回)

(41) その「(略) ォャォャ此の作者の名も，例の人とは少し違ふ様だネェ (春色梅美婦祢・六・十二回)

(42) (西心)「や，そりやちと (筆者注：相手が語った浄瑠璃の) 文句が違つたやうだ。」(河竹黙阿弥・花街模様薊色縫・四幕目・墓守庵室の場)

(43) (九介) どれどれ見せなせえ，(ト手紙を取つて開き見て，)「浄瑠璃名題——(ト名題，太夫連名を読んで)こりやあ何だか違つたやうだ。(河竹黙阿弥・船打込橋間白浪・三幕目・見附前の場)

(44) 弥次「夫アいゝがさつき二階から見た蒸気は余程日本のとは違ふ様だのう。(西洋道中膝栗毛・十四・下)

(45) 「いや日は違ふ様だ。(吾輩は猫である・二)

(46) 吾輩の尊敬する尻尾大明神を礼拝してニヤン運長久を祈らばやと，一寸低頭して見たが，どうも少し見当が違ふ様である。(吾輩は猫である・三)

(47) 「どうも路が違ふ様だね」(二百十日・四)

(48) 然し其の時其の砌りの長蔵観と比較して見ると大分違つてる様だ。(坑夫)

(49) 昨夕と今朝とでは殆ど十五度以上も違ふ様である。(坑夫)

(50)　熊本の教師とは丸で発音が違ふ様だ。(三四郎・一)

(37) は，伊勢に到着した弥次が，はぐれてしまった同じ町内の「米屋の太郎兵衛」をさがそうとして，「上方ぐみ」の中にまぎれこんだ時の発話である。(39) は北八が間違って別の家へ入り込んだときの発話である。(37) と (39) は，同じ文献において，同じような状況で「そうな」と「ような」の両方が用いられていることになるが，(37)では「どふか」をとっている点が異なる。しかし，全体を通して見ると，「違う」は，本来「そうな」をとっていたが，しだいに，「ようだ」をとるようになったものと考えられる。

なお，「違う」が名詞形をとったときには，「のようだ」が用いられる。

(51)　落ちるのと降りるのは大変な違の様だが，その実思つた程の事ではない。(吾輩は猫である・七)

［気がちがう・気がふれる］

(52)　(清) そしてマァ炭かたんといろうと思つて女郎衆の顔が青さめて来たはな。(住) ェ、気が違つたそふた。(穴知鳥)

(53)　(茶や)「気がちがッたそふだ。誰《だが》そういわしッた。(大通秘密論)

(54)　(綱) おきやアがれ。気が違つたそうだ。(芳深交話)

(55)　おきやァがれ，気が違つたさふだ。(山東京伝・鐘は上野哉)

(56)　犬「とんだ事を。おのしは気が違つたそふだぜ。(山東京伝・世上洒落見絵図)

(57)　(くら)「あんまりさましなんすな。おめへにほれてゐんすとさ。(里) 気がちがつたそうだ。何ほれて居るもんだ。(傾城買四十八手・やすひ手)

(58)　気が違ひなんしたそうだ。(繁千話)

(59)　チツト気をたしかに持なヨ。丹次郎だの亭主だのと，何だかおめへ，気でもふれて居るやうだぜ。(春色辰巳園・初編・一・一回)

これらは，人が「気が違う」「気がふれる」状態にあると推測したことを表したものであるが，以上の例からみると，「気が違う」などは，本来「そうだ」

をとっていたものと考えられる。ただし，(59) は「何だか」という語があるように，発話者の推論の結果を表すために「ようだ」をとったものとみることができる。

なお，このような推量の場合に，次の例のように，「と見える」をとることがある。

(60) 番僧「コリヤおのれ気が間違ふておると見へる。(東海道中膝栗毛・六・下)

9.「寝る」「寝ぼける」「かぜをひく」の場合

次に，「そうだ」をとる用例の多い，「寝る」「寝ぼける」「かぜをひく」について見ることにする。

[寝る]

(1) (客)「ゥ、、、ァ、ついねたそふな。もうなん時じや。(陽台遺編・妣閣秘言・秘戯篇)

(2) (女郎)「ヱ、もふねてゐるそうなわいな。(陽台遺編・妣閣秘言・秘戯篇)

(3) (花丈) ゥ、ァ、ついねたそうな。何時しや。(かしく) しらんわいな。(月花余情 (異本)・秘戯篇)

(4) (かしく) ヱ、もふねてゐるそうなわいな (月花余情 (異本)・秘戯篇)

(5) (外ノ女郎)そんなら，いかうか。お休なんし。清さンは，寐たそうだ。と，行 (お夏) (清が顔を見て) よくねたのふ (と我もねる) (寸南破良意・手代)

(6) (川) もう寐たか (大) ァィ寐なんすさうでおぜんす。(川) よしよし。(粋町甲閨)

(7) (長) あの子ァどうしたの (直) ねてゐるさうさ。(南客先生文集)

(8) (権) (はとなりをのそきて) おぎんほうどふだねぶつたそふだぜ。(喜夜来大根)

(9) (かる) 来ル。うきさん。うきさん。ャレハァ寐たさうだァ。(軽井茶

話道中粋語録）

(10) コレコレ長松よ。長松よ。イヤこいつもふねくさつたそふじや。（東海道中膝栗毛・六・上）

(11) あの衆はもう寝入りよつたさうぢや。（木曾街道続膝栗毛・一）

(12) 仁三「（略）もし江戸のお方，お休みなされましたか，もしもし。あゝ昼の労れでよう寐られたやうぢや。（略）」（蔦紅葉宇津谷峠・三幕目・藤屋座敷の場）

(13) 花子「これさ，お前もう寐るのか。これさこれさ。（ト揺り起せど寐入りし思入，花子思入あつて，）むゝ，よく寐たさうだ。（都鳥廓白浪・三幕目・按摩宿の場）

(14) 「（略）マアおきてくんな。ハヽア宵はまち夜中はこがれあかつきの夢に見る気で寐こんだそうだ。（西洋道中膝栗毛・四・下）

(15) 仕方がないから本を読んで居りますと，母はすやすや寝るやうでございますから抜け出さうとすると，（業平文治漂流奇談・十三）

(16) 又少したつて寝たやうだから抜けようとすると文治々々と呼びます。夜徹《よどほ》し起します。（業平文治漂流奇談・十三）

(17) 新「あゝ，トロトロと中で寝た様だ，何処《どこ》だか薩張《さつぱり》分らねえが何処だい。（真景累ヶ渕・三十五）

（6）は，「川」が客の淀車が寝たのかどうかを「大吉」に聞く場面で，「大吉」は客は寝たようだと答えたものであるが，敬語形をとった珍しい例である。（9）は，「かる」が同輩の「うき」がすでに寝てしまったと推測した発話である。

この中で，「ようだ」をとっているのは4例ある。そのうち，(12) は，寝た理由を「昼の労れで」として推量するものであるから，「ようだ」をとったと見ることができる。また，「そうだ」は発話時のおける事態を推測したことを表すもので，それを条件句として表すことは普通ではない。そのため，(16) においては「ようだ」を用いたものと考えられる。また，(15) の「寝るやうでございます」は敬語形であるために「ようで」をとったと見られる。ただし，(17) はそのような理由が見いだせない。（1）（3）と (17) は自分が寝たこ

とを述べたものだが，両者をくらべると，やはり「そうだ」から「ようだ」に移っていったことは確かであろう。

次の例は，このような場面において，「ような」ではなく，「様子」が用いられたものである。

(18) 北八「なんでも巫子のしんぞうめが，いつちこちらのはしにねたよふすだ。(東海道中膝栗毛・三・上)

(19) ふたりもそのまゝねかけると，はやふすまひとへとなりのざしきに，むことよめがねるよふす，(東海道中膝栗毛・四・上)

(20) 無心の熊もお町の言葉を聞分けしか，児を抱いたまゝころりと寝た様子でござります。(後の業平文治・二十五)

(21) 新吉は仕方がないから足を摩《さす》つて居りますと，すやすや疲れて寝た様子だから，いゝ塩梅だ，此間に御飯でも喫《た》べやうと膳立をしてゐると這出して，(真景累ヶ渕・十七)

次の例は，このような場面において，「ようだ」ではなく「らしい」が用いられたものである。

(22) 泣く子は幸ひに寝たらしい。(永日小品・火鉢)

なお，「寝る」が名詞として用いられるばあいには，「のようだ」が用いられる。

(23) 「先刻御誘ひ申さうと思ひましたが，よく御寝の様でしたから，失礼して一人参りました」(門・十八)

[寝ぼける]

(24) (文) アイ塩茶でおぜんす (と滝川が前へ) (川) おれじやァねへ。ぬしに上もうしや。此子ァねぼけたそうだ。(武) 可愛そうに。ねむからうぞい。(粋町甲閨)

(25) (馬ご) あんだねぼけたそうだ。(呼子鳥・やました八景)

(26) (与五)「あこれ，待つて下され，ついぞ見たこともない中間衆，向う河岸で突当つたの何のと，こつちはさつぱり覚えのないこと，無体なことをさつしやるな。(角助)「なに，覚えがねえ，此野郎は寐とぼけて居るやうだ。(河竹黙阿弥・夢結蝶鳥追・序幕・花水橋の場)

(24) は，眠たがっている「子供お文」が，塩茶を指示されたのとは違う相手に差し出した場面である。これらは人が寝ぼけた状態にあると推測したものであるが，このように，「ねぼけた」などは「そうだ」をとっていたが，しだいに，(26) のように「ようだ」をとる例が現れるようになったものと考えられる。

［かぜをひく］

(27) ア、おれや風引いたさうなとて。涕打ちかみて紛かす忍涙ぞ道理なる。（五十年忌歌念仏・中）

(28) （女郎）ェ、こないにいふても馬の耳に風。ほんにかぜひいたそふな。ハァくつさめ。サァおくめどん。こんやはいの。あたとんなこないにさむいめして来ても何とも思ひくさるまい。（陽台遺編・姚閣秘言）

(29) （かしく）（略）ェ、こないにいふても馬のみゝに風，ほんに風引たそうな。ハァ、サァお久米どん今夜はいのう。あたどんなこないにさむいめしてきても何とも思ひくさるまい。（月花余情（異本・秘戯篇））

(30) エヘンエヘンエヘンエヘン風を引ィたさふだ。（回覧奇談深渕情）

(31) かみゆひ「サアあなた，髪なされませんかいな。弥次「イヤどふか湯に入たら，ぞくぞくして，風でもひいたよふだ。（東海道中膝栗毛・五編追加）

(32) 文弥「あんまり皆さんが，あんまあんまとおつしやるので，私は嘘をしつゞけで。ハツクシヨ。どうか風を引いたやうでござります。」（蔦紅葉宇津谷峠・三幕目・藤屋座敷の場）

(33) 「風邪を引いてゐた様でしたが」（彼岸過迄・停留所・十）

これらは人がかぜをひいた状態であると推測したものであるが，「かぜ（を）ひく」などは，「そうな」「そうだ」をとっていたが，(31) (32) のような「どうか」を含む文や，(33) のような過去に関わる推測を表す文では「ようだ」をとったものと考えられる。

なお，次の例は，「ように」ではなく，「と見える」によって表されたものである。

(34) 風邪を引いたと見えて，此のあついのにちやんちやんを着て，小判形

の桶からざあと旦那の肩へ湯をあびせる。(吾輩は猫である・七)

10. おわりに

以上のように，同じような状況において，様態を表す「そうだ（な)」と「ようだ(な)」のいずれが用いられるかについて比較した。しかし，「そうだ(な)」と「ようだ(な)」にはもともと違いがあったものと考えられる。「そうだ(な)」は発話時点における事態を推測するものであって，そこで文を終止することが多く，その文には感動詞を伴うことがある。一方，「ようだ（な)」は，発話時点における事態を推測するだけにとどまらず，推測する内容が広く，さらには，「どうか」などの疑問を含む語を伴うこともある。また，推測した内容を条件句として表すことができる。また，「そうだ（な)」は敬語形をとるのがまれであるのにたいして，「ようだ（な)」は「ようでございます」などの敬語形をとることができる。

「そうだ（な)」と「ようだ（な)」には，活用語の終止形に接続する場合と，名詞に接続するばあいがある。後者の場合については，本稿でとりあげることはできなかったが，いずれの場合にも，江戸期に様態を表す「そうだ（な)」はしだいに「ようだ」にとってかわられたとみられる。また，この意味は，動詞を用いた「と見える」，名詞を用いた「様子」が活用語に下接することによっても表された。

さらに，連用形に接続する「そう」は，その接続のために，終止形接続の「ようだ」とは異なる意味を表すことが多いが，その一部は，終止形接続の「ようだ」によって表されることがある。

このような経過によって，「そうだ（な)」は「ようだ（な)」によってとってかわられたのであるが，明治期には「ようだ」と近い意味を表す「らしい」が広く用いられるようになり，名詞に接続したり，動詞や形容詞の現在形，過去形およびそれぞれの否定形に接続することなどが可能になった。

このようなことから，様態を表す「そうだ」は，その一部は，既に江戸期から「ようだ」によって表されるようになり，さらに明治期においては，「らしい」

によっても表されるようになったと見られる。明治期以降は様態を表す「そうだ」は一部には残ったようであるが，やがて共通語からはその姿を消してしまった。

参考文献

仙波光明1976「終止連体形接続の『げな』と『さうな』——伝聞用法の発生から定着まで——」（『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』表現社　所収）

原口裕1971「活用語に接続する『ラシイ』——明治におけるその定着の状態——」（「語文研究」31・32）

松本守1998「江戸語のソウダとヨウダについて」（「専修国文」63号）

宮地幸一1979「助動詞『さうだ』考——滑稽本詞章の考察——」（『田辺博士古稀記念国語助詞助動詞論叢』桜楓社　所収）

宮地幸一1988「助動詞『さうだ』考——人情本詞章の考察——」（『此島正年博士喜寿記念国語語彙語法論叢』桜楓社　所収）

作　品　名	作　　者	刊／初演	底　　本	発行所
丹波与作待夜の小室節	近松門左衛門	1707頃初	日本古典文学大系	岩波書店
五十年忌歌念仏	近松門左衛門	1707初	日本古典文学大系	岩波書店
冥途の飛脚	近松門左衛門	1711頃初	日本古典文学大系	岩波書店
山崎与次兵衛寿の門松	近松門左衛門	1712頃初	日本古典文学大系	岩波書店
夕霧阿波鳴渡	近松門左衛門	1712初	日本古典文学大系	岩波書店
国性爺合戦	近松門左衛門	1715初	日本古典文学大系	岩波書店
鑓の権三重帷子	近松門左衛門	1717初	日本古典文学大系	岩波書店
博多小女郎波枕	近松門左衛門	1718頃初	日本古典文学大系	岩波書店
心中宵庚申	近松門左衛門	1722初	日本古典文学大系	岩波書店
東海道中膝栗毛	十返舎一九	1802-9	日本古典文学大系	岩波書店
浮世風呂	式亭三馬	1809-13	日本古典文学大系	岩波書店
春色梅児誉美	為永春水	1832-3	日本古典文学大系	岩波書店
春色辰巳園	為永春水	1833-5	日本古典文学大系	岩波書店
春色梅美婦禰	為永春水	1841-2	日本古典文学大系	岩波書店
古契三娼	山東京伝	1787	日本古典文学大系	岩波書店
通言総籬	山東京伝	1787序	日本古典文学大系	岩波書店
傾城買四十八手	山東京伝	1790	日本古典文学大系	岩波書店
傾城買二筋道	梅暮里谷峨	1798	日本古典文学大系	岩波書店
悪言鮫骨	山東京伝	1785	山東京伝全集一	ぺりかん社
鐘は上野哉	山東京伝	1786	山東京伝全集一	ぺりかん社
扮接銀煙管	山東京伝	1788	山東京伝全集一	ぺりかん社
早道節用守	山東京伝	1789	山東京伝全集一	ぺりかん社
世上洒落見絵図	山東京伝	1791	山東京伝全集二	ぺりかん社
人間一生胸算用	山東京伝	1791	山東京伝全集二	ぺりかん社
廬生夢魂其前日	山東京伝	1791	山東京伝全集二	ぺりかん社
堪忍袋緒〆善玉	山東京伝	1793	山東京伝全集三	ぺりかん社
花之笑七福参詣	山東京伝	1793	山東京伝全集三	ぺりかん社
福徳果報兵衛伝	山東京伝	1793	山東京伝全集三	ぺりかん社
先開梅赤本	山東京伝	1793	山東京伝全集三	ぺりかん社
諺下司説話	山東京伝	1796	山東京伝全集四	ぺりかん社
正月故叟談	山東京伝	1797	山東京伝全集四	ぺりかん社
弐刻価万両回春	山東京伝	1798	山東京伝全集四	ぺりかん社
京伝守十六利鑑	山東京伝	1799	山東京伝全集四	ぺりかん社
甘哉名利研	山東京伝	1800	山東京伝全集四	ぺりかん社
通気智之銭光記	山東京伝	1807	山東京伝全集四	ぺりかん社
賢愚湊銭湯新話	山東京伝	1802	山東京伝全集四	ぺりかん社
舛鯉瀧白旗	河竹黙阿弥	1851	黙阿弥全集一	春陽堂
しらぬひ譚	河竹黙阿弥	1853	黙阿弥全集一	春陽堂
都鳥廓白浪	河竹黙阿弥	1854	黙阿弥全集二	春陽堂
鼠小紋東君新形	河竹黙阿弥	1854	黙阿弥全集二	春陽堂
夢結蝶鳥追	河竹黙阿弥	1856	黙阿弥全集一	春陽堂

様態を表す「そうな」から「ようだ」への推移（紙谷）

作　品　名	作　　者	刊／初演	底　　本	発行所
蔦紅葉宇津谷峠	河竹黙阿弥	1856	黙阿弥全集一	春陽堂
網模様燈籠菊桐	河竹黙阿弥	1857	黙阿弥全集三	春陽堂
仮名手本硯高嶋	河竹黙阿弥	1858	黙阿弥全集三	春陽堂
花街模様薊色縫	河竹黙阿弥	1859	黙阿弥全集三	春陽堂
三人吉三廓初買	河竹黙阿弥	1860	黙阿弥全集三	春陽堂
龍三升高根雲霧	河竹黙阿弥	1861	黙阿弥全集三	春陽堂
忠臣蔵後日建前	河竹黙阿弥	1865	黙阿弥全集五	春陽堂
人間万事金世中	河竹黙阿弥	1879	黙阿弥全集十三	春陽堂
東海道四谷怪談	鶴屋南北	1825	新潮日本古典文学集成	新潮社
陽台遺編	未詳		洒落本大系三	中央公論社
古今吉原大全	沢田東江？		洒落本大系四	中央公論社
郭中奇譚	臼岡先生	1769	洒落本大系四	中央公論社
郭中奇譚（異本）	未詳		洒落本大系四	中央公論社
遊子方言	田舎老人多田爺	1770	洒落本大系四	中央公論社
辰巳之園	夢中散人寝言先生	1770	洒落本大系四	中央公論社
南江駅話	未詳		洒落本大系五	中央公論社
婦美車紫虧	浮世遍歴斎道郎苦先生？	1774	洒落本大系六	中央公論社
甲駅新話	大田南畝	1775	洒落本大系六	中央公論社
青楼楽美種	雲中舎山蝶?		洒落本大系六	中央公論社
寸南破良意	南鐐堂一片	1775	洒落本大系六	中央公論社
当世左様候	藩中館新吾三	1776序	洒落本大系七	中央公論社
契国策	未詳		洒落本大系七	中央公論社
浄瑠璃稽古風流	佐伊座散人	1777	洒落本大系七	中央公論社
穴知鳥	松寿軒東朝	1777	洒落本大系七	中央公論社
売花新駅	朱楽館主人	1777序	洒落本大系七	中央公論社
広街一寸間遊	献笑軒	1777序	洒落本大系七	中央公論社
契情買虎之巻	田にし金魚	1778序	洒落本大系七	中央公論社
三幅対	無学堂大酔	1778序	洒落本大系七	中央公論社
大通秘密論	夢中庵	1778序	洒落本大系八	中央公論社
廻覧奇談深淵情	楓某	1779序	洒落本大系八	中央公論社
酔姿夢中	采遊	1779序	洒落本大系八	中央公論社
竜虎問答	蓬莱山人帰橋	1779序	洒落本大系八	中央公論社
粋町甲閨	大田南畝		洒落本大系九	中央公論社
南客先生文集	南楼坊路銭?		洒落本大系九	中央公論社
多佳余宇辞	不埒散人	1780序	洒落本大系九	中央公論社
芳深交話	穴好	1780序	洒落本大系九	中央公論社
喜夜来大根	梨白散人		洒落本大系十	中央公論社
軽井茶話道中粋語録	大田南畝		洒落本大系十	中央公論社
廓遊唐人寐言	未詳		洒落本大系十	中央公論社
雲井双紙	北斗先生	1781序	洒落本大系十	中央公論社
真女意題	天竺老人	1781序	洒落本大系十	中央公論社
西洋道中膝栗毛	仮名垣魯文	1870	明治文学全集	筑摩書房

作　品　名	作　　者	刊／初演	底　　本	発行所
菊模様皿山奇談	三遊亭円朝	1871	円朝全集九	春陽堂
怪談牡丹灯籠	三遊亭円朝	1884	円朝全集二	春陽堂
業平文治漂流奇談	三遊亭円朝	1885	円朝全集四	春陽堂
英国孝子ジョージスミス之伝	三遊亭円朝	1885	円朝全集九	春陽堂
真景累ヶ渕	三遊亭円朝	1888	円朝全集一	春陽堂
文七元結	三遊亭円朝	1889	円朝全集一	春陽堂
根岸お行の松　因果塚の由来	三遊亭円朝	1889	円朝全集四	春陽堂
政談月の鏡	三遊亭円朝	1892	円朝全集一	春陽堂
名人長二	三遊亭円朝	1895	円朝全集九	春陽堂
後の業平文治	三遊亭円朝		円朝全集四	春陽堂
闇夜の梅	三遊亭円朝		円朝全集一	春陽堂

吾輩は猫である	夏目漱石	1905	漱石全集一	岩波書店
倫敦塔	夏目漱石	1905	漱石全集二	岩波書店
カーライル博物館	夏目漱石	1905	漱石全集二	岩波書店
坊つちやん	夏目漱石	1906	漱石全集二	岩波書店
草枕	夏目漱石	1906	漱石全集二	岩波書店
二百十日	夏目漱石	1906	漱石全集二	岩波書店
野分	夏目漱石	1907	漱石全集二	岩波書店
虞美人草	夏目漱石	1907	漱石全集三	岩波書店
坑夫	夏目漱石	1908	漱石全集三	岩波書店
夢十夜	夏目漱石	1908	漱石全集八	岩波書店
三四郎	夏目漱石	1908	漱石全集四	岩波書店
永日小品	夏目漱石	1909	漱石全集八	岩波書店
それから	夏目漱石	1909	漱石全集四	岩波書店
門	夏目漱石	1910	漱石全集四	岩波書店
彼岸過迄	夏目漱石	1912	漱石全集五	岩波書店
行人	夏目漱石	1912	漱石全集五	岩波書店
こころ	夏目漱石	1914	漱石全集六	岩波書店
硝子戸の中	夏目漱石	1915	漱石全集八	岩波書店
道草	夏目漱石	1929	漱石全集六	岩波書店
明暗	夏目漱石	1930	漱石全集七	岩波書店